コラム 4-2　ワトソンによる恐怖条件づけのアルバート坊やは，その後どうなったのか

ワトソンが行った恐怖条件づけでは，生後 11 カ月のアルバートを対象に，白いネズミを見せて，アルバートが触ろうとすると，その背後で鋼鉄の棒をハンマーで叩いて大きな音をたてることを繰り返しました。実験の前は，アルバートはネズミを怖がっていませんでしたが，実験後には，アルバートはネズミを怖がるようになっただけではなく，ウサギや毛皮のコートなど，白い毛が生えたものという似た特徴をもつものにまで恐怖を示すようになりました。この実験から，おとなの抱く不安や恐怖も，多くはこれに類似した幼年期の経験に由来しているとワトソンは主張しました。

ネズミに興味を示すアルバート

恐怖条件づけの後，毛の生えたお面を怖がるアルバート

ウサギでも泣き出すアルバート

https://www.youtube.com/watch?v=9hBfnXACsOI

このような実験をすることは，現在では研究倫理上許されません（当時でも，アルバートの両親は，よく許したものだと思います）。それは別にして，もしワトソンの主張が正しければ，幼少期のトラウマ体験で，アルバートは成長後，動物恐怖か毛皮恐怖になってしまったか，少なくとも PTSD などの不適応状態になっていたはずです。しかし，アルバートのその後の人生を調べた結果によれば，彼は特に問題なく，平穏な人生を過ごしたとのことです（よかったですね）。

ところで「おとなの抱く不安や恐怖も，多くはこれに類似した幼年期の経験に由来している」というワトソンの主張は，どこかで聞いた覚えがありませんか？　そう，精神分析の創始者フロイトの幼児期体験による不適応原因説と基本的に同じです（Lecture 2 で紹介）。ワトソンの行動主義と，フロイトの精神分析は，一見のイメージは全く無関係ですが，実は基本的な考え方は共通する部分があるのです。この事実は，行動主義と精神分析が，20 世紀前半のアメリカ心理学を支配することになったことと無関係ではありません。そして 20 世紀後半になると，この 2 つ考え方は，いずれも支持されなくなりました。これはアルバートの成長後をみれば，すでに予見されていたのかもしれません。

（出所）Watson, J. B., & Rayner R.　（1920）. Conditioned emotional reactions. *Journal of Experimental Psychology*, 3, 1–14.